

避難命令

高野吾朗

「危険です 早く避難しなさい 命を守る行動をすぐ取りなさい」

わからないことがあるたびに 「わからない自分が悪いのではなく
わからなくさせている他人こそが悪い」と すぐに逆上する人間が
あまりに多すぎるので 幼いあなたは 今日もまた 部屋にこもり
必死に眠ろうと目を閉じるのだが 火星の表面のような暗い大地に
ひっそりと立つ一本の巨樹を いつものごとく夢見かけたところで
またもや街中に例の命令が響き渡り あなたの両眼は冴えてしまう

「あなたの現在地は実験場の中心付近です 最も危険な地帯です」

子供のあなたは仕方なく外に出て 真夜中の道をゆっくり走りだす
実験場だと？ 嘘をつけ ここはただの住宅街で 今夜もいつもの
ごとく どこもかしこも平穏無事じゃないか それでも あなたは
まだまだ子供なので 言われたとおりに走り続ける 暗闇の中から
強引に光が引き出されるかのように 避難所がその姿を現す だが
扉には鍵がかかっている あなたは窓から中の様子を見るしかない

「家畜の死体があちこちに放置されていますが 接触は厳禁です」

避難所の中には 海の向こうからやってきた 移民らしき女たちが
疲れた顔で座り込んでいる そして一斉に あなたの顔を見るのだ
「あの少年も 大人になったら この国の大人のオスたちのように
わたしたちの国までわざわざやってきて 地元の女たちを まるで
家畜のように蔑みながら 金で買い 欲情だけ満たして去るのだ」
そう激しく言われた気がして 意味もよくわからぬまま あなたは

「無重力状態となる可能性もあります 急な浮遊にご注意下さい」

怯えながらそこを立ち去る しばらく行くと まるで 偶然を司る
神様が あなたを大人にするためだけに用意してくれたかのごとく
次の避難所が見えてくる だが またも扉は閉まっており入れない
窓から覗くと 図書館のごとき本棚たちに囲まれて 少女がひとり
絵を描いている どの本も声が出せるらしく 何やら互いに激しく
論争中である 「他者が与えてくれる運命に受動的に身を委ねろ」

原爆文学研究会報

第六〇号

原爆文学研究会二〇二〇年三月

「誰も信じてはいけません 私だけを信じていれば生き残れます」

そう「生き方」を説く声の一方で「他者など不要だ 能動的かつ孤独に死を選ばずして 真実の生などありえない」と反論する声もある そんな論争にかまうことなく 少女は一心不乱に描き続ける 何かの生き物の絵らしいが その顔には驚愕があり 頭頂には美がある 首から胸にかけては 疑いと惑いと欲望と寂しさが縦に並び 心臓のあたりには 不安と希望と安心と失望がこんがらがっている

「避難所を転々とした場合 あなたの移動の痕跡は記録されます」

右手には 苦しみと悲しみが描かれ 左手からは 楽しさと喜びがぶら下がり 右足には憎悪と恐怖と怒りが そして左足には 愛と恋と憐みがつまっている 「この怪物のせいで避難させられた！」 大声でそう叫ぶと 少女が窓の外あなたを見る そして 死んだ自分を見つけたかのように驚く すると次第に 少女の体は一頭の羊へと変身してしまう そして 周囲の紙という紙を貪りだすのだ

「置き去りにしてきた家族や友人のことは 忘れてしまいなさい」

異なる時代へとまるで浮遊するかのように その場を離れた子供のあなたには 置き去りにしてきた 愛する人の沈黙の声は もはや届かないらしい その純粋な声を 全て字句通り翻訳してあげよう 「あなたは常に逃げてばかり いつまでその無責任を反復する気だ あの闇からこの闇へ あの性からこの性へと 踊るがごとく軽々と 移るたびに あなたの痕跡は砂粒のごとく風に消されていくのだ」

「無事に避難し終えるまで うかつに路上で寝入らないように！」

疲れきったあなたが ようやくたどり着いたのは 一本の巨樹の下 まるであの少女が描いていたあの絵のような枝ぶりだ 牛のように眠ろうとするあなたの耳元に 再び あの 使者の 声が まるで死者を 激しく 揺り起こすかのように 遥か遠くから 響き渡り

第六〇回 原爆文学研究会 報告



二〇一九年十二月二日(土)、九州大学西新プラザで、第六〇回原爆文学研究会が開催されました。今回は後山剛毅さんと中野和典さんによる研究発表、そして二〇一九年五月に英宝社より刊行された松永京子さんの『北米先住民作家と〈核文学〉——アポカリプスからサイバンスへ』についての合評会、という内容でした。

後山さんの「原民喜の「人間」論——『原爆以後』における「新しい人間」の位置付け」は、『原爆以後』に散見される「新しい人間」のモチーフを詳しく辿りながら、原における原爆体験と関わらせて意味付ける意欲的な発表でした。原が試みたのは、原爆により身体の組成を変えられた〈人間〉の表象であり、それが極めて物質的、機械的な側面から為されている点、興味深く感じられました。原の『原爆以後』については、前回も遠田憲成さんの発表がありました。難解な『原爆以後』の評価を多角的に試みる考察がなされつつあることは喜ばしいことだと思えます。

また中野さんの発表「教科書と「原爆文学」——林京子「空罐」を中心に」は、「空罐」が、学校やK寺などの空間を描き分けながら、トラウマや記憶の分有・分断などの問題を巧みに提示した作品であることを、先行研究や教科書での取り扱い、また作中に登場する場所を丹念に調査した上で論じたものでした。



会終了後の忘年会を兼ねた懇親会も大いに盛り上がりました。

休憩を挟んだ後、松永京子さんの著書についての合評会が開かれ、川口隆行さん、一谷智子さんがコメントし、松永さんからのリプライがありました。本書は、現代科学あるいはマジョリティのマスター・ナラティブに対して、周縁的なマイノリティの固有性、口承文芸的な伝統などによって対抗する先住民族の〈核文学〉を評価するものです。抑圧された者が原爆・核の犠牲になるという構図が、国境を越えて反復されてしまうことを私たちに訴えかける原爆・核文学の問題意識や意義を、再確認することができました。

年末の慌ただしい時期の開催でしたが、いつもながら活発な議論がなされ、

◇研究発表

原民喜の「人間」論

——『原爆以後』における「新しい人間」の位置付け

後山 剛毅

本発表は、原民喜の作品集『原爆以後』に登場する〈新しい人間〉のモチーフを分析することで、原民喜と原爆の記憶を捉えなおす試みである。「人間」は、戦前・戦後を通して原民喜作品の重要な主題である。一九三五年に白水社から自費出版された原の最初の作品集『焰』には、



すでに無数の奇怪な「人間」が登場している。しかしながら、戦前の原は、奇怪な「人間」を〈新しい人間〉とは考えず、あくまで人間の枠組みのなかで、ある種のパターンからのズレとして観察しつづけた。それに対して、戦後作品とくに『原爆以後』のなかで度々登場するのが、〈新しい人間〉と捉えられるモチーフの数々である。

作品集『原爆以後』のなかで、随所に散りばめられた数々の〈新しい人間〉たちは、「鎮魂歌」(一九四九)のなかに流れ込んでいる。「鎮魂歌」は、山本健吉によって「夏の花と表裏一体の作品」と評された。「鎮魂歌」の形式と内容は、「夏の花」を相対化するものであり、「夏の花」の特権性に抗している。本発表は、原民喜が描いた〈新しい人間〉のモチーフを辿ることで、「原爆体験の記憶」と原民喜の関係を再考した。

発表者は、『原爆以後』のなかで、「氷花」、「火の踵」と「火の唇」に注目し、〈新しい人間〉たちは架空の〈小説〉の構想とともに描かれること、それらの〈小説〉は完成されることなく、それぞれの作品が閉じられていることを指摘した。そして、これらの作品に登場する断片的なモチーフの数々を、〈新しい人間〉との関係で再読することで、原が原爆体験を言語表現と〈リズム〉の問題として捉えていたことを明らかにした。

質疑応答では、『原爆以後』以外の作品における〈人間〉の扱い、言語とリズムの関係についてなどの質問があった。本発表は、対象を『原爆以後』に絞っていたため、その他の作品について考察は行えなかった。また、原民喜が言語とリズムの問題をどのように書こうとしたのかについて、踏み込んだ議論を提示することができなかった。これらの点は、今後の課題として、原民喜と言語あるいはリズムの問題について研究を進めたい。

◇研究発表

教科書と「原爆文学」

——林京子「空罐」を中心に

中野 和典



川口隆行(「原爆文学」という問題領域」プロブレマティク 二〇〇一)が指摘する通り、一九七〇年代に井伏鱒二「黒い雨」(一九六五―六七)と原民喜「夏の花」(一九四七―四九)が相次いで国語科教科書に掲載されるようになったことを、日本における原爆の記憶がヘトラウマ記憶〈から〉物語記憶へと変換されたことの現れと考

えることができる。その後、八〇年代には林京子「友よ」とギヤマンビードロ」(一九七八)所収)が教科に掲載されるようになり、二〇一九年度は「黒い雨」と「夏の花」を掲載する教科書がそれぞれ一種類ずつに減り、代わって「空罐」を掲載する教科書が五種類に増えている。この状況をどのように考えればよいのか。N高女生たちの被爆体験を描いた「空罐」が国語科教材の定番になったことを〈憤み〉深い「原爆乙女」の物語や〈無垢な戦争被害者〉という自己表象によって戦争の〈加害者〉としての過去を忘却する〉という〈ナショナルな欲望〉を満たそうとするイデオロギーがより強力になったことの現れと見ることはできる。ただし、堀本嘉子(「原爆文学研究会報」五二号二〇一七)が指摘する通り、「空罐」は単なる「平和教育」の教材ではなく、〈被爆者／非被爆者という分割に意味がない〉ことを考えさせる教材になる側面も持っている。

本発表では「空罐」に描かれるものごとに注釈を加え、この小説についての文学研究と教材研究に検討を加えた上で「場所」という視点に注

目して新たな論の構築を試みるという方法によって、「空罐」の〈ナショナルな欲望〉に回収されない側面を追究した。具体的には深津謙一郎「記憶を分有すること」(二〇〇五)等の先行研究、高野光男「空缶」(二〇一七)等の指導資料、『新築記念 県立長崎高等女学校』(一九三〇)等の記録や証言を参照しつつ、「空罐」に描かれる中庭、講堂、K寺、教室をそれぞれ「共有できる記憶」、「共有できない記憶」、「忘れようとして忘れられない記憶」、「忘れようとして忘れていた記憶」を浮かび上がらせる場所として考察した。

さらに「空罐」と野坂昭如「火垂るの墓」(一九六七)の比較も行う心づもりだったが、これは時間切れで十分に論じることができなかった。会場からは多くの示唆に富むコメントや質問をいただいた。論文化する際に大いに参考にさせていただこうと考えている。

◇合評会

松永京子著 『北米先住民作家と〈核文学〉』

——アポカリプスからサバイバンスへ』

(英宝社、二〇一九)

評者より

一谷 智子

松永氏の長年の研究成果が結実した一冊「北米先住民作家と〈核文学〉——アポカリプスからサバイバンスへ」の合評会に登壇する機会を頂いた。本書のねらいは「従来の〈核文学〉研究の傾向に対するオルタナティブを模索し提示すること」(12頁)であり、そのために本書は、核の植民地主義ともいえる状況下でウラン採掘や核実験、さらには核廃棄物の投



機による二重、三重の被害を受けてきた先住民による文学に注目する。冷戦期以降、アメリカでは多数の核をめぐる作品群が出版されたが、それらは「核や原爆によってもたらされる世界の終わり」を描いた「ニュークリア・アポカリプス」が主流であり、原爆や核兵器の製造過程において環境的文化的影響を受けた人々の視点はほとんど含まれることがなかった。こうした問題意識をもとに、本書は五名の北米先住民作家の作品を丹念に分析しながら、そこに共通して見出される「支配、悲劇、そして犠牲者であることを放棄する」(本書のタイトルにもなっている)「サバイバンス」のナラティブを鮮やかな筆致で明らかにしてゆく。

評においては、ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』の批評性的問題や、本書が論じる先住民の核文学の、アメリカの(核をめぐる)言説空間における受容などについて問うかけを行った。しかし、私が最も強調したかったのは、本書のもつ意義だったと思う。本書の一番の功績は、北米先住民の核文学の体系化である。これまでアメリカ文学の分野で先住民文学に関する研究というものは少なからずあったが、その作品群に通底するテーマとして「核の問題」があることを明らかにし、先住民の核文学の系譜をこれだけ見事に示して見せた研究はなかった。更に、本書は新たな核文学研究の構築の方向性を示してみせた。実際に核兵器が使用された地域の人々の視点を含まない極めて限定的な(ジャック・デリダに代表される)「核批評」の在り方を再考・再構築するには、既に起こった実際の核被害の経験を含み、ウラン採掘から核兵器の製造・使用、原子力発電へと至る核の問題を、グローバル被爆者の観点から考察する核批評の新しい紡がれ方を模索する必要がある。本書は、その一つの形を示すものであり、核の植民地主義のもと、その被害を実際に最

前線で経験してきた先住民の人々、広島と長崎の被爆者の人々、さらには未だに生まれ続けている世界の各地の被爆（曝）者の様々な声を拾い上げ、つなげてゆく批評家ならびに研究者の役割の重要性を感じさせる一冊である。しかし、このような筆者の評に関しては、異論もあるのかもしれない。「核文学」という範疇へ包摂されえない「原爆文学」の立ち位置というものが川口氏によって強調されていたからである。この点について議論を深める十分な時間がなかったのが惜しまれるが、会場からはたぐさんのコメントや質疑が寄せられ、松永氏の妙々たる応答が印象的だった。本書の誕生を心から喜びたい。

著者より

松永 京子



二〇一九年五月、『北米先住民作家と〈核文学〉——アポカリプスからサバイバンスへ』を刊行した。二〇〇六年に提出した英語での博士論文を土台とし、これまでの研究を日本語でまとめたものである。アメリカ先住民文学における核・原爆表象は修士論文のときから取り組んできたので、実に二〇年の長きにわたって同じテーマと作家たちに接してきたことになる。人生の半分近くを費やした研究ということもあって、本書を自分の手から離して客観的に評価する準備は、まだできていないかもしれない。けれども、本合評会は、拙著に対するさまざまな意見や批判を登壇者やフロアからいただくことで、本書から抜け落ちてしまった言葉、本書の限界と課題、そして今後の展望について考える貴重な機会となった。

一谷智子氏の「ヴィゼナーがアメリカ政府の原爆投下責任をどのように考えていたのかが明らかにされない」、北米先住民と日本の被爆者の連帯の可能性が今ひとつ明確にならない」という指摘は、本書がうまく言葉にできなかった部分のひとつである。ヴィゼナーは『ヒロシマ・ブギ』のなかで、核を使用・保有する国の指導者たちの欺瞞を暴き続けてはいるものの、米政府の原爆投下責任を直接的に弾劾するわけではない。また、被爆者に〈共感〉しながらも、被爆者と〈連帯〉しようとしているわけでもなく、先住民の主権や存続を抹消しようとしてきた勢力に対抗する〈ネイティヴ・サバイバンス〉を基盤としたこれまでの作品のスタンスを崩していない。このようなヴィゼナーの核の言説をどのように捉え、位置付けるべきか、私自身の態度はアンビバラントなままである。

川口隆行氏からは、村上陽子氏が書評で指摘しているような「マスターナラティヴを先住民のディスコースに回収することがポジティヴに位置付けられている」ことの問題点や、先住民作家たちが市民権あるいは市場を獲得することで主流社会に取り込まれていくことについての指摘があった。確かに、主流の言説と先住民の言説との狭間でこぼれ落ちてしまいう声をすくい上げる作業は必要である。また、本書がとりあげた先住民作家たちは、英語で執筆し、出版し続けているという点において、主流社会における「成功者」ともいえる。一方で、本書でとりあげた北米先住民作家たちの声が、〈先住民文学〉という豊かな文学領域の系譜を引き継ぎながらも、既存の社会や〈核文学〉においては周縁化されてきたことも事実である。本書が、このような傾向を覆すと同時に、いまだ周縁化されている人々の声に耳を傾けるきっかけとなれば、これほど喜ばしいことはない。

機関誌「原爆文学研究」第一九号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一九号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二五行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿で投稿の場合は二〇二〇年九月中旬、データファイル（Wordか太郎）を添付して

投稿の場合は同年九月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁（機関誌の書式）につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八八〇―八五二〇 宮崎市船塚一丁目一―二
宮崎公立大学人文学部 楠田剛士研究室

彙報

第六〇回原爆文学研究会

○日時 二〇一九年十二月二一日（土）

○会場 九州大学西新プラザ大会議室

○研究発表

原民喜の「人間」論

――『原爆以後』における「新しい人間」の位置付け

後山 剛毅

教科書と「原爆文学」――林京子「空罐」を中心に

中野 和典

○合評会 松永京子著『北米先住民作家と核文学』

――アポカリプスからサイバンスへ

川口隆行・一谷智子・松永京子

編集後記

この会報では、巻頭にエッセイを掲載していますが、今号では初めて、高野吾朗氏による詩が巻頭を飾りました（高野さん、ありがとうございます！）。皆さん、ぜひお読みください。なお、原稿を横書きでいただきましたのでそのまま掲載しましたが、やや読みにくい点、お詫びいたします。

ところで、世界的にコロナウイルスによる新型コロナウイルス感染が拡大しつつあります。ある種の衛生的な発想から人と人が分断・隔離され、差別や憎悪、争いが生じることはこれまでの歴史からも明らかですが、偏見に囚われず、そうした発想に抵抗することの重要性を、原爆文学は教えてくれているのだと思います。

既に原爆文学研究会ホームページでもお知らせしていますが、残念ながら三月二八日（土）に北九州市立大学で開催予定だった第六〇回原爆文学研究会は、新型肺炎感染を避けるためにやむなく中止といたしました。登壇あるいは参加を予定されていた皆さまには誠に心苦しい次第ですが、ご了承ください。一日も早く感染の恐れが無くなり、研究会を開催できる日が来るのを祈るばかりです。

（野坂昭雄）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四―〇一八〇福岡市城南区七隈八一―一九一

福岡大学人文学部中野和典研究室内

tel 092-871-6631（代表）

e-mail nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>